

ゑにし

日蓮大聖人御真筆写

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部  
〒130-0001  
東京都墨田区吾妻橋 2-2-10  
TEL 03(3622)5086  
FAX 03(3829)2766

第366号

光久御住職御書講義

# 妙法曼陀羅供養事

此の曼陀羅(まんだら)は文字は五字七字にて候へども、三世諸仏の御師、一切の女人の成仏の印文なり。冥途(めいど)にはともしびなり、死出(しで)の山にては良馬となり、天には日月の如し、地には須弥山(じゆみせん)の如し。生死海の船なり。成仏得道の導師なり。此の大曼陀羅は仏滅後二千二百二十余年の間、一閻浮提(いちえんぶだい)の内には未だひろまらせ給はず。

(御書六八九頁)

## 《通釈》

この妙法曼陀羅、すなわち御本尊様の中央首題の「南無妙法蓮華經」文字は、わずか五字の妙法蓮華經、あるいは七字の南無妙法蓮華經ですが、過去・現在・未来の数多くの仏様の御師であり、すべての女性(を含める一切衆生)が残らず成仏できる、それを保証する「しるし」であります。死後、真つ暗で何も見えない時は灯となつて御本尊様が導いてくださり、また御本尊様を受持信行し抜いた人は、妙法五字の良馬に乗つて速やかに靈山淨土へ到り、天には日月のように世界を照らし、地上にあつては須弥山のように世界の中心をなしていく。波のように流転する生死の苦しみの中で、迷いの衆生を救つて海を渡り、涅槃の地に到らしめる船である。一切衆生をして成仏得道を示す大導師であります。この御本尊様は仏滅後二千二百二十余年の正法・像法時代の間、いまだ世界中において誰も弘められておりません。

## 解説

本抄は御執筆の年次や宛名が明記されず、さらに御真蹟が失われたことから、不明な点が多い。しかし一般的に文永十(一二七三)年、大聖人様が御年五十二歳の時、佐渡の二谷(いちのさわ)においてお認(したた)されたこと

められ、対告衆は阿仏房の妻・千日尼に与えられたとされています。また、大聖人様が御本尊様をお認められた初期の頃で、千日尼が御本尊様に御供養申し上げた、その志を愛でられ、御本尊供養の功德と御本尊様の力用を御教示され、さらに信心を励まされた御返事でありませう。よつて、別名を『本尊供養抄』とも称されます。

今回の箇所は冒頭にあたり、よく葬儀の際に御僧侶が奉読する引導文とされています。また本抄の題号である「妙法曼陀羅」について、総本山第二十六世・日寛上人は総じては他宗の曼陀羅、別しては真言宗の曼陀羅を簡別(かんべつ)えらびわけの意)として、妙法蓮華經の曼陀羅のみが勝れ、功德があることを示すと御指南されています。

また日寛上人は曼陀羅の語について『妙法曼陀羅供養見聞筆記』に三大秘法の三義を含むとされ、第一に輪円具足(本門の本尊)を挙げています。すなわち、「本門の本尊とは、十界の聖衆、中央の妙法蓮華經に帰入するなり」(日寛上人文段集七〇七頁)と仰せられ、御本尊様は妙法五字を中心として、十界の衆生の一界も欠けることなく具足した、真の一念三千の御本尊様であると示されております。

第二に道場の義(本門の戒壇)を御教示され、「此の本尊は既に三世の諸仏の発心得道の場合なるが故に道

場と云う、場とは即ち戒壇の義なり」(同七〇八頁)と仰せです。

第三に功德聚(本門の題目)は「此の本門の題目には、十方三世の諸仏の因果の功德を具足するなり」(同頁)と御教示です。

「一切の女人の成仏の印文」について、『唱法華題目抄』に「諸教は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠(こんけつ)等の者を救ふ秘術をば未だ説き頭はさずとおぼしめせ。法華經の一切經に勝れ候故は但此の事に侍(はべり)」(御書二二六頁)とあります。法華經以外の諸經、例えば阿彌陀經において悪人や愚かな人、女人、また成仏の機根が欠けている人たちを救う術が無かつた。しかし、法華經はいかなる悪人や愚かな人であっても、すべての人に成仏・悟りを開くことができるのです。これが爾前權經と法華經との大きな相違であります。

『撰時抄』に「されば機に随つて法を説くと申すは大なる僻見(びやくけん)なり」(同八四六頁)と、相手の機根にしたがつて法を説くのではなく、時に随つて法を説くべきなのです。つまり、末法の衆生は、過去に積尊から下種結縁されていらない本未有善の衆生であり、強いてこの寿量品文底下種の妙法を持たせる折伏こそが肝要なのであります。

(文責・編集部)